

一、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

① 今の東京の夜景は、世界で一番美しいかもしれない。そういう感想を漏らすと、異論を唱える人は少なからずいる。夜景はやっぱリムンバイですよとか、香港のヴィクトリアピークから見下ろす夜景にはかなわないなどと、うるさ方の意見は百出するけれども、同意してくれる人は案外と少ない。やはり、思い過ぎかもしれないと思いはじめていた矢先、都市をテーマとしたテレビのドキュメンタリー番組で、世界の空を飛び回るパイロットたちの言葉が、シヨウカイされていた。

「いま、上空から眺めて一番きれいな夜景は東京」

世界の夜景を機上から眺め続けている人々の意見だけに説得力がある。まさに我が意を得た思いがした。世界広しといえども、東京ほど広大な広がりを持つ都市はないし、信頼感あるひとつひとつの灯りがそういう規模で結集しているわけである。このあたりに僕はひとつの確信を持つ。掃除をする人も、工事をする人も、料理をする人も、灯りを管理する人も、すべて丁寧に篤実に仕事をしている。あえて言葉にするなら「緻細」「丁寧」「緻密」「簡潔」。そんな価値観が根底にある。日本とはそういう国である。

② これは海外では簡単に手に入らない価値観である。パリでも、ミラノでも、ロンドンでも、たとえば展覧会の会場ひとつ日本並みの完成度で作ろうとするなら、その骨折りは並大抵ではない。基本的に何かをよりよく丁寧にやろうという意識が希薄である。労働者は時間がくれば作業をやめる。効率や品質を向上させようという意欲よりもマイペースを貫く個の尊厳が仕事に優先するとも言える。それを前提に、管理する側がほどよく制御して仕事を進めていく。確かに、ヨーロッパには職人気質というものが存在するが、日常の掃除や、展示会場のセツエイなどは、職人気質の及ぶ範囲ではないのかもしれない。さらに言えば、こうした普通の環境を丁寧にしつらえる意識は作業をしている人たちの問題のみならず、その環境を共有する一般の人々の意識のレベルにも繋がっているような気がする。特別な職人の領域だけに高邁な意識を持ち込むのではなく、ありふれた日常空間の始末をきちんとすることや、それをひとつの常識として社会全体で暗黙裡に共有すること。美意識とはそのような文化のありようではないか。

③ ものづくりに必要な資源とはまさにこの「美意識」ではないかと僕は最近思いはじめている。これは決して比喻やたとえではない。ものの作り手にも、生み出されたものを喜ぶ受け手にも共有される感受性があるからこそ、ものはその文化の中で育まれ成長する。まさに美意識こそものづくりを継続していくための不断の資源である。しかし一般的にはそう思われていない。資源といえば、まずは物質的な天然資源のことを指す。

日本は天然資源に恵まれないので、工業製品を生み出すために高度な「技術」を磨いてきたと言われる。戦後の高度経済成長は、そのような構図でもものづくりを進めてきた成果である。世界はそう認識しているし、日本人もそう思ってきた。戦後の日本が得意とした工業生産は「I」「I」、つまり均一にたくさん製品を作ることをきわめて安定した水準で達成することであった。また、製品を小型化する凝縮力のよくなものがそこに働いて、日本の工業製品の優位をより鮮明に示すことに成功した。日本の生産技術は、量を前提とした品質と、緻密さや凝縮性を工業製品として体現した結果、世界からの高い信用を獲得したのだ。

しかしながら、ここで言う「技術」とは、言い換えれば繊細、丁寧、緻密、簡潔にものづくりを遂行することであり、それは感覚資源が適切に作用した結果、獲得できた技の洗練ではないか。つまり、今日において空港の床が清潔に磨きあげられていたり、都市の夜景をなす灯りのひとつひとつが確実に光を放つことの背景にある同じ感受性が、規格大量生産においても働いていたのではないかと考えられる。高度な生産技術やハイテクノロジを走らせる技術の、まさに先端を作る資源が美意識であるという。コンキョはここにある。

日本は石油や鉄鉱石のような天然資源に乏しい。これは事実で、この事実が歴史の重要な局面でこの国の方針に大きく影響し、第二次大戦に日本が歩みを進めてしまった要因のひとつもここにある。しかし、今日においては、天然資源の確保に汲々としてきたことが、むしろプラスに転じはじめている。もしも日本に石油が豊富に湧き出ていたら、おそらくは環境や省エネルギーに対する意識は今日ほどには高まっていなかったはずだ。周囲を海に囲まれ、その大半が山であるという恵まれた自然も、湧き出る石油や排ガスによって後戻りできないほどにぼろぼろに汚染されていたかもしれないし、地球温暖化をもたらす温室効果ガスの排出量規制について、京都で国際会議を主宰する主体性も持ち得ていなかっただろう。むしろ、日本の石油消費や二酸化炭素の排出を「ヨクセイすべく、中国やアメリカが必死で説得するような事態を迎えていたかもしれない。マナーという富はもっと巨大にこの国に蓄えられ、医療も、教育も、通信も、全て無料で国が提供するような裕福な国になっていたかもしれないが、その豊かさは、やがて訪れる次の時代に対応できず、悲惨な衰退を運命づけられていたかもしれない。

幸いなことに、日本には天然資源がない。そしてこの国を繁栄させてきた資源は別のところにある。それは繊細、丁寧、緻密、簡潔にものや環境をしつらえる知恵であり感性である。天然資源は今日、その流動性が保障されている世界においては買うことができる。オーストラリアのアルミニウムも、ロシアの石油も、お金を払えば買えるのだ。しかし文化の根底で育まれてきた「Ⅱ」はお金で買うことはできない。求められても輸出できない価値なのである。

冷静に見ると、日本の工業製品は、つましきやエネルギー消費の視点、そして使用者の成熟にもなう製品の洗練という点で、すでに優位性を発揮しはじめている。世界同時不況のせいですこし見えにくくなってはいるが、日本の自動車メーカーがひととき世界一の販売台数を記録したのもその一端である。生活者の意識も、省エネルギーや環境に対する負荷の軽さを前向きに受けとめるようになり、暮らしの、目に見えない中心に、過剰を避け、節度をわきまえていく志向や理性をひそやかに宿らせているのである。

今日、僕たちは、自らの文化が世界に貢献できる点を、感覚資源からあらためて見つめ直してみようだろうか。そうすることで、これから世界が必要とするはずの、つましきや合理性をバランスよく表現できる国としての自意識をたずさえて、未来に向かうことができる。

(原 研哉『日本のデザイン—美意識が作る未来』より)

注1 高邁…人格などが気高くすぐれていること。

注2 暗黙裡…口に出して言わないさま。

注3 汲々…あくせくしてゆとりのないさま。

問一 部 a 「ショウカイ」・ b 「セツエイ」・ c 「コンキョ」・ d 「ヨクセイ」を漢字に改めなさい。

問二 部 X 「百出する」・ Y 「我が意を得た」の意味として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

X 「百出する」

- ア 次第に高まる
- イ 数多く出る
- ウ みな同じになる
- エ 違いが出てくる

Y 「我が意を得た」

- ア 自分の意見を言えた
- イ 自分が中心になって議論できた
- ウ 自分の思い通りに事が進んだ
- エ 自分の考えとぴったり合った

問三 部① 「東京の夜景は、世界で一番美しいかもしれない」とありますが、筆者はなぜこのように考えるのですか。六十字以内で説明しなさい。

問四 部② 「海外では簡単に手に入らない価値観」とありますが、ヨーロッパの人々が一般的に重視しているものは何ですか。本文中から十五字以内で抜き出して答えなさい。

問五 部③ 「ものづくりに必要な資源とはまさにこの『美意識』ではないか」とありますが、「この『美意識』」を四十五字以内で説明しなさい。

問六

部④「むしろプラスに転じはじめています」とありますが、その例として当てはまらないものを次の中からすべて選び、記号で答えなさい。

- ア お金では買うことのできない美意識を手に入れることができた。
- イ 省エネルギーを重視する日本の自動車売れるようになった。
- ウ 医療、教育、通信を国がすべて提供できるようになった。
- エ 周囲を海に囲まれ、大半が山であるという豊かな自然に生きることができた。

問七

【Ⅰ】・【Ⅱ】に当てはまることばを、本文中からⅠは六字、Ⅱは四字でそれぞれ抜き出して答えなさい。

問八

筆者の主張として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 東京の夜景の素晴らしさは、他国と違い、灯りの光の加減が節度をもってつましく点灯するよう管理されているところにある。
- イ 再び日本が高度経済成長以来の発展を遂げるためには、ものづくりの原点に立ち返り、職人氣質の高邁な意識を持つ必要がある。
- ウ 日本の繊細、丁寧、緻密、簡潔なものをつくりあげる感性は、日本が環境問題において主体性を発揮する不可欠な要素である。
- エ 自然環境に配慮する技術に、つましさや合理性の精神をバランスよく加えることで、日本は世界に貢献できる可能性を秘めている。

二、次の文章は、「俊介」の中学受験のことについて、母（菜月）、父（浩一）、そして難聴の妹（美音）とで話し合いをしている場面です。この文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「私、これまでやりたいこと全部、諦めてきたの。長女だから、弟がいるからって両親の言う通りにしてきた。それでも私、高校だけはやめたくなかった。いまになって高校を中退したことをすごく後悔してるの。やめた時はいつか高卒認定試験を受けようって思ってたけど、でも働き出したらそんなエネルギーどこにも残ってなくて……。」^① 私ね、自分が中学しか出てないってこと、浩一以外の人には言えてないの」

話しているうちに当時の悔しさが思い出され、両方の目から涙が溢れた。「いまやめたら絶対に後悔します」そう言って何度も何度も自分の両親に頭を下げてくれた女性教師の横顔が、まぶたの裏に浮かぶ。

「菜月の過去のことは……おれにはどうにもしてやれないよ」
涙を見た浩一が、驚いた顔で呟く。^② この人にこんなことを言ってもしかたがない。そうは思っても、一度溢れ出した感情を抑えることはできない。

「うちの親も弟たちも、私が……高校生だった私が犠牲になったこと、いまはすっかり忘れてるのよ。あの時のことはもう済んだこと、自分たちは A 苦しい時代を乗り切ったんだって美談になってるの。でもね、私はいまも思ってる。どうしてあの時、私の両親は『自分たちこのとはいいから』って言うってくれなかったのかなって。自分たちの暮らしより娘の未来を考えてくれなかったのかなって、そう思ってるの」

B をしてほしかった。 B をしてでも私の未来を守ってほしかった。いま浩一と結婚して幸せな暮らしをしていて、でも時々、ほんのたまにだけれど、悔しくて泣きたくなることがあると菜月は打ち明けた。自分たちの親世代ならともかく、いま自分の周りには中卒の人はほとんどいない。学歴差別をするつもりはないが、自分自身のこととして、学歴が中学で終わっていることを気にせずにはられないのだと菜月は涙ながらに訴えた。

「菜月、なに言ってるんの、おれは俊介が望むなら大学に行かせるつもりだよ。美音も行きたいなら行けばいい。金が足りないなら奨学金を借りて、学校を出てから本人たちが働いて返せばいいことだろ？ でも中学受験は無理だよ、やっぱ」

「無理？」

「何度も言ってるけど、受かったところで私立には行かせられないだろう？」

「うん……無理なのかもしれない」

でもね、と言った後、喉が詰まり菜月は唇を閉じた。感情を押しとどめるために両目を固くつむり、浅い呼吸を繰り返す。^③ 夫婦の間に暗い色の大きな川が流れている。もう互いの声は届かない。そう思った時だった。

「お父さん」

よく通る明るい声が、背後から聞こえてきた。自分の部屋にいた俊介が、いつのまにか扉を開けて立っている。

「お父さん、これ見て」

真剣な表情で、俊介が手に持っていた冊子を浩一の前に差し出した。

「なんだこれ？」

「りんたろう 倫太郎が受験する中学校」

彼に借りてきたのか、俊介が手にしていたのは中学校の入学案内パンフレットだった。光沢のある表紙には、レンガ造りの立派な校舎の写真が載っている。

「ふぞくこまごめ 東栄大学附属駒込中学校……。倫太郎くんはここ受けんのか」

「そう言ってた」

「難しいのか」

「うん、日本で一番難しいんだって。おれも、ここを目指したいんだ」

俊介が口元を引き締めて真面目に答えると、浩一が「日本で一番難しいって、おまえ」と笑い出した。嘲笑うのではなく、心底楽しそうな顔で大きく口を開けている。俊介がサッカーを始めてすぐの頃に「ぼくは大人になったら日本代表選手になる」と宣言した時も、たしかこんな笑い方をしていたなと菜月は思い返す。

「お父さん、この学校は国立なんだ。だから学費がすごく安いんだ。倫太郎がそう言ってた」

俊介がパンフレットを指差し、浩一にじり寄っていく。「国立」「学費が安い」と言われても、菜月にはピンとこなかった。たぶん浩一もそうだろう。

「倫太郎、この学校の入試問題っていつのを持っててさ、おれも見せてもらったんだ。むちゃくちゃ難しかった。なにが書いてあるのか、さっぱりわからなかった」

「だったらおまえ……」

「でもねお父さん、塾に行って一生懸命勉強すれば、その難しい問題も解けるようになるって倫太郎が言うんだ。学校やホップでは習えないことを、塾なら教えてくれるって」

「お願いします、中学受験をさせてください、塾に行かせてください、おれはこの中学校しか受けない、それでだめだったら地元の広綾こうりょう中学に行くから、と俊介が切実な声を出し深く頭を下げる。

「なんだよ俊介、こんなことで男が頭下げるな」

浩一が俊介の肩に手を置き、丸めた背を起こそうとすると、^④裸足の足先に涙のしずくがぼとりと落ちた。

「俊介……」

浩一が困ったように顔をしかめ、菜月のほうを見てくる。テレビの前で手話をしながら踊っていた美音が走り寄ってきて、（お兄ちゃんどうし

たの?)と俊介の手を引っ張る。

「お兄ちゃん、行きたい中学があるんだ」

俊介は泣き顔のまま美音に向かって口を動かす。美音はそんな兄の口元を食い入るように見つめている。

(じゃあ行ったらいいじゃん。お兄ちゃんの行きたい中学に、行ったらいいよ?)

「うん。いまお父さんに頼んでいるところなんだ。その中学に入るために、塾に行きたいって」

兄の言葉を一言も見逃すまいと、美音が目を細めて俊介の顔を見つめていた。

美音は俊介の言葉に頷くと、すぐに浩一のそばに近づいていきその腕をつかんだ。そして、

(お兄ちゃんを塾に行かせてあげて)

と空気を切る力強さで話しかける。

「でもお兄ちゃんが塾に行くようになったら、美音は大きい子どもの保育園に行かないといけないんだぞ」

(どうして?)

「お兄ちゃんが塾に行くために、お母さんがお仕事しなきゃいけないんだよ」

俊介が声押し殺して涙をこぼし続ける中で、浩一と美音の静かな会話が交わされる。美音はきつく唇を引き結び、(大丈夫)

X Y と小さな手を忙しく動かし続ける。

浩一はしばらく子どもたちを交互に見つめていたが、やがてパンフレットに視線を落とした。学費が記載された箇所を凝視し、黙ったままにかを考へこんでいる。

「なあ俊介、おまえはどうしてこの中学に行きたいんだ?」

パンフレットから視線を上げると、浩一が俊介に問いかけた。菜月も、俊介の横顔を見つめ答えを待つ。

「科学部に入りたいんだ。おれはこの学校で科学の勉強がしたい」

「科学部? ……ああこれか、『科学の甲子園』東京都大会優勝、全国大会の東京代表……かな。お父さんにはよくわからないけど、なんかすごいぞうだ」

「東駒の科学部は全国レベルだって倫太郎が言った」

「そうか。そーいや俊介には夢があるんだよな」

「うん」

「どんな夢なんだ? 科学と関係あるのか」

「うん。でもいまは……言いたくない。夢が叶った時に話す」

「なんだそれ。それじゃプレゼンにならないだろ」

言いながら、浩一は息を漏らすように笑った。笑ってから覚悟を決めたように小さく頷き、

「^⑤わかった。この東栄大学附属駒込中学なら受験してもいい。でももしここがだめだったら広綾中に行ってくれよ」

と俊介の肩に手を置く。大きな手のひらで肩をつかまれた俊介が、また涙を滲ませ、美音がその顔を心配そうにのぞきこむ。菜月はそんな家族の姿を目にしながら込み上げてくるものを必死に抑え、「浩一、ありがとう」と口にした。

「いや、そんな、改めて礼を言われることじゃないけど」

浩一が力の抜けた声で答える。

「無理言っでごめん。浩一にはいつも感謝してる。あなたと結婚してから私、ずっと幸せだった……」

彼はファミリーストランでアルバイトをしていた菜月を好きになってくれた人だ。仕事の帰りにほとんど毎日やって来て、メニューの中で一番安いナポリタンを食べていた。「ナポリタンお好きなんですね」と、ある夜、菜月がレジを打ちながら話しかけたら、「そうじゃなくて、あなたが好きなんです」と耳を真っ赤にして言ってくれた。

「なんだよ急に、子どもたちの前で……。それより俊介、入塾テストとやら、ちゃんと合格するんだぞ」

また泣き出した俊介が、俯いたままこくりと頷く。

浩一が俊介の頭をぼんぼんと軽く叩き、「じゃあおれ風呂呂入るよ。洗車したから体中ワックス臭くてさ」と浴室へと歩いていく。時計を見るといつのまにか十時を過ぎていた。

(藤岡 陽子『金の角持つ子どもたち』より)

注 ホップ…通信教育。

問一

——部①「私ね、自分が中学しか出てないってこと、浩一以外の人には言えてないの」とありますが、「私」はなぜ言えていないのですか。その理由が書かれている連続する二文を抜き出し、最初の十字を答えなさい。

問二

——部②「この人にこんなことを言ってもしかたがない」とありますが、それはなぜだと考えられますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 中学受験は無理と断固主張する「浩一」には何もわかってもらえないと思ったから。
- イ 「菜月」の過去のことは変えられるものではなく、「浩一」には何もできないから。
- ウ 「浩一」に八つ当たりしているだけだと「菜月」自身が気がついたから。
- エ 世間一般と同様に、「浩一」が学歴にこだわっているのがわかるから。

問三

A に当てはまることばとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 娘のお陰で
- イ 夫婦の努力で
- ウ 弟のお陰で
- エ 家族で

問四

B に当てはまることばを、本文中から二字の熟語で抜き出して答えなさい。

問五

——部③「夫婦の間に暗い色の大きな川が流れている」とありますが、この比喩^{ひゆ}はどのようなことをたとえていますか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 目の前が真っ暗になり、夫の姿が見えなくなったこと。
- イ 両目をつぶると自分の呼吸以外は聞こえなくなってしまう様子。
- ウ 川は「菜月」の涙で、泣きながら気持ちをぶつけてしまった後悔。
- エ 二人の考えが異なっていて歩み寄れないこと。

問六

——部④「裸足の足先に涙のしずくがぼとりと落ちた」とありますが、この時の「俊介」の気持ちとして最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 家族に負担がかかることを気にしながらも、塾で受験勉強をしたいという気持ちを真剣に伝えようとしている。
- イ 大口をたたいてしまったことを後悔しながらも、塾で受験勉強をしたいという気持ちを真剣に伝えようとしている。
- ウ 地元の中学校へは進学したくないので、塾で受験勉強をしたいという気持ちを真剣に伝えようとしている。
- エ 学歴で母のような後悔はしたくないので、塾で受験勉強をしたいという気持ちを真剣に伝えようとしている。

問七

X

・

Y

では、「美音」が「浩一」に自らの覚悟を伝えていきます。それぞれに入ると考えられることばを、本文中のことばを用いて答えなさい。

問八

——部⑤「わかった。この東栄大学附属駒込中学なら受験してもいい」とありますが、「浩一」がこのように言ったのはなぜですか。五十五字以内で説明しなさい。

問九

本文の表現の特徴を説明したものととして、適当なものには「○」、適当でないものには「×」で答えなさい。

- ア 「空気を切る強さで話しかける」「小さな手を忙しく動かし続ける」という表現は、妹の「美音」が手話を用いているというだけではなく、その時の美音の心情の描写でもある。
- イ 最後に「浩一」と「菜月」の馴れ初めなに関する回想の場面を入れることによって、「浩一」に対する「菜月」の愛情の深さが読者に伝わりやすくなっている。
- ウ 主人公である「俊介」の視点から、家族一人一人の個性的な人柄が分かりやすく描かれており、「俊介」の、家族に対する愛情の深さがうかがわれる。
- エ 「学歴差別」「学費」「中学受験」などの言葉を使うことによって、未来の格差社会と言われることに対しての問題意識を読者に持たせるように工夫されている。

三、次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

昔、物の怪煩ひし所に、物の怪、物つきに憑きていふやう、「おのれは祟の物の怪にても侍らず。うかれて

まかり通りつる狐なり。塚屋に子どもなど侍るが、物をほしがりつれば、かやうの所には、食物散ろぼふものぞかして、まうで来つるなり。

しとぎばら食べてまかりなん」といへば、しとぎをせさせて、一折敷取らされたれば、少し食ひて、「あなうまや、あなうまや」といふ。「この女のしとぎでも食べて帰るとしよう。」

しとぎほしかりければ、①「それもの憑きてかくいふ」と憎みあへり。

②「紙賜りて、③これ包みてまかりて、専女や子どもなどに食はせん」といひければ、紙を二枚引きちがへて、包みたれば、大きやかなるを腰に

挟みたれば、胸にさしあがりてあり。かくて「追ひ給へ。まかりなん」と験者にいへば、「追へ追へ」といへば、立ちあがりて倒れ伏しぬ。暫

しばかりありて、やがて④起きあがりたるに、懐なる物⑤さらになし。⑥失せにけるこそ不思議なれ。

(『宇治拾遺物語』より)

注1 物の怪渡しし程に…物の怪に取り憑かれ、わずらっている病人から、その物の怪を祈禱によって「物つき」という他人へ一時的にのり移らせた時に。ここでは、「女」にのり移らせている。

注2 塚屋…墓守の住む小屋。

注3 しとぎ…米の粉をこねて作った餅。

注4 専女…老女。ここは老狐のこと。

注5 験者…祈禱をして、取り憑いた物の怪を退散させたり、病気を治したりする僧。

問一 部一「物をほしがりつれば」・2「いへば」・3「起きあがりたるに」の主語をそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 狐 イ 子どもなど ウ 験者 エ この女

問二 部A「いふ」・B「かやう」を現代仮名遣いに改め、すべてひらがなで答えなさい。

問三 部②・⑤の解釈として最も適当なものをそれぞれ次の中から選び、記号で答えなさい。

② 「紙賜りて」

- ア 紙を与えて イ 紙を折って ウ 紙をいただいて エ 紙をたくさん持って

⑤ 「さらになし」

- ア 再び移動していた イ すっかりなくなっていた ウ さらに移動していた エ 皿からなくなっていた

問四 部①「そらもの憑きてかくいふ」とはどういうことを言っているのですか。最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 狐のついたふりをしてこんなことを言うのだ。

イ 狐が本当にとりついて言わされているのだ。

ウ 空から妖怪がやってきてとりついたのだ。

エ 専女や子どもに食べさせるためにこう言うのだ。

問五 ——— 部③ 「これ」について、

1、何を指していますか。本文中から三字で抜き出して答えなさい。

2、これ以降の文章で言い換えている語句を本文中から五字以内で抜き出して答えなさい。

問六 ——— 部④ 「立ちあがりて倒れ伏しぬ」とは、どのような様子を表していますか。それを説明したものととして最も適当なものを次の中か

ら選び、記号で答えなさい。

ア 取りついていた狐の物の怪が体から抜け出したために気を失っている様子。

イ 狐の物の怪の激しい攻撃により物つきの女が気を失っている様子。

ウ 験者の祈祷の儀式に堪^たえかねた狐の物の怪が倒れている様子。

エ 験者に追い詰められた狐の物の怪が逃げる力を無くして、倒れている様子。

問七 ——— 部⑥ 「失せにけるこそ不思議なれ」とありますが、なぜ無くなったと考えられますか。説明しなさい。

〔以下空白〕

